

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

1日

大安 翼

旧7月29日

日曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

ほうとうげ

宝塔偈

「難持の教えを弘める者を讃える」

法華経を弘めることが、お釈迦さまが世に出た目的であるから、弘教者を増やすことが何より喜びであると告げ、覚悟を持って教えを弘めるという大きな誓願を実現せよと、激励・讃歎して『見宝塔品』が結ばれます。

日蓮宗の法要では、唱題に続いて宝塔偈を読みますが、これは「読経」としてではなく、経文や玄題に対する讃嘆と、この難持の妙法を持ったことに対する歡喜とを表すものです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰
2024年

9月

2日

赤口 軫
旧7月30日

月曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

ぐ ほ け きょう む う け けん

求法華経 無有懈怠

「過去世において法華経を求めた」

お釈迦さまは前世の遠い過去において、ある国の王であった時、法華経を求め修行しました。この場合の法華経は文字に書かれた経文ではなく、絶対の真実の教えということですから。その法華経を求め、どれほどの苦労があるろうとも途中で心が緩むこともなく努め、この上ない仏さまの智慧を得たいと願っていました。そして王位を捨て、教えを説いてくれる師を求めて旅立ちました。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

友引 角

旧8月1日

3

日

火曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

時じ有う仙せん人にん

「時に仙人有り」

教えを求めていた王のもとに、尊い妙法蓮華経を知っているという仙人が現れました。

そして自分の言うことに背かず、実行する決心があるなら教えを説こうと言います。

尊い教えを知る師の言うことに間違いはないと信じ、服従する気持ちがあれば伝えることができるというのには道理です。

そう信じさせる師の威厳を具えていた仙人と、大きな覚悟を決めた王の出会いの場面です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

4日

先負 亢

旧8月2日

水曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

そく ずい せん にん

即随仙人

く きゆう しょ しゆ

供給所須

「仙人が言う通り、日常の奉仕をする」

王は仙人が言う通り、果実を採り、水を汲み、
薪を拾い、食事の準備をし、仙人が疲れると自
分が地面に腹ばいとなり背中に腰掛けさせて休
ませるなど、あらゆる場面で仕えていました。
それでも王は身も心も怠けることなく、仙人に
奉仕します。

教えを得るための近道はなく、苦勞をいとわず
愚直に歩むしかないということです。

全力打ち込んだ努力に無駄はないのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

5日

仏滅 氏

旧8月3日

木曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

時じ仙せん人にん者しゃ今こん提だい婆ば達だ多た是ぜ

「過去世の師である仙人は今の敵、提婆達多」

その時の王は自分で、導いてくれた仙人は提婆達多だとお釈迦さまは告げられました。

提婆達多はお釈迦さまに敵対し新教団をつくり、種々の危害を加えていました。

過去世の師が今の敵だということです。

困難に立ち向かうとき、表に現れていなかっ
た力が引き出されるものです。

自分に艱難辛苦を与える相手は、自分を励まし成長させてくれる有難い存在なのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

6日

大安 房

旧8月④日

金曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

由提婆達多

善知識故

「提婆達多は善知識である」

お釈迦さまは過去世の師である提婆達多に非常に感謝していると言われました。

「善知識」とは「善き友」という意味です。

提婆達多は常にお釈迦さまを迫害していたけれども、そのような者がいたからこそ、心緩むことなく修行に励み悟りに至ることができたので善知識として感謝したのです。

考え方や立場が違う相手と対立せず、善知識として受け入れる仏教の寛大さが読み取れます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

7日

白露

赤口 心

旧8月5日

土曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

だいば だつた

提婆達多

とうとくじようぶつ

きやくご かわりようこう

却後過無量劫

当得成仏

「提婆達多は未来世において仏と成る」

提婆達多は無量劫という永い時を経て、仏に成

ることができるとお釈迦さまは言われました。

悪事をなす者でも、その心が一度ひるがえれば

善事に力を尽くすことがあります。

今、お釈迦さまの敵である提婆達多も、将来に

は心を改め、正しい教えを求め、仏の境界に達

するだろうとお釈迦さまが告げられたのです。

この提婆達多の成仏は、「悪人成仏」の例として

法華経の特徴のひとつとされています。

妙法蓮華經提婆達多品第十二

爾時仏告諸菩薩。及天人四衆。吾於過去。無量劫中。求法華經。無有懈倦。於多劫中。常作國王。發願求於。無上菩提。心不退轉。為欲滿足。六波羅蜜。勤行布施。心無憒惜。象馬七珍。國城妻子。奴婢僕從。頭目髓腦。身肉手足。不惜軀命。時世人民。壽命無量。為於法故。捐捨國位。委政太子。擊鼓宣令。四方求法。誰能為我說大乘者。吾當終身。供給走使。時有仙人。來白王言。我有大乘。名妙法蓮華經。若不違我。當為宣說。王聞仙言。歡喜踊躍。即隨仙人。供給所須。採果汲水。拾薪設食。乃至以身。而作狀座。身心無倦。于時奉事。經於千歲。為於法故。精勤給侍。令無所乏。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言

〈略〉

仏告諸比丘。爾時王者。則我身是。時仙人者。今提婆達多是。由提婆達多。善知識故。令我具足。六波羅蜜。慈悲喜捨。三十二相。八十種好。紫磨金色。十力。四無所畏。四攝法。十八不共。神通道力。成等正覺。広度衆生。皆因提婆達多。善知識故。告諸四衆。提婆達多。却後過無量劫。當得成仏。号曰天王如来応供。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

8日

先勝 尾

旧8月6日

日曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

じょう しん しん ぎょう

浄心信敬

「浄らかな心で疑うことなく信じる」

お釈迦さまは法華経を聞いて、浄らかな心で疑うことなく信じることができれば、仏に成ることができると説かれました。

その実例として、提婆達多の「悪人成仏」や、八歳の龍女の「女人成仏」が説かれたのです。

しかしこの後、文殊菩薩や舍利弗尊者ですら「女人成仏」を信じられず疑問を抱き、龍女に反論する場面が描かれます。

「浄心信敬」はとても難しいものなのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

9日

友引 箕

旧8月7日

月曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

じゆ しょう みよう らく

受勝妙楽

「非常に勝れた楽しみ」

法華経を信じる者が、もし人間界か天上界に生まれ変わったなら「勝妙の楽」非常に勝れた楽しみを得るとお釈迦さまは告げられました。

「勝妙の楽」とは、欲望を満たして快樂にふけることではなく、真実の教えを求め者が教えを繰り返して学ぶたびに新たな気づきがあり、悟りに近づいていると実感する楽しみです。

生まれ変わった場所でも法華経を聞き、「浄心信敬」によって得られる楽しみです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

10日

先負 斗

旧8月8日

火曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

にやくざい ぶつ ぜん れん げ け しょう

若在仏前 蓮華化生

「若し仏前にあらば、蓮華より化生せん」

法華経を信じる者は、仏さまの御前において、蓮華から生じるとお釈迦さまは説かれました。蓮の華は泥の中から生じ、美しい花を咲かせることから、煩惱にまみれた凡夫でも仏や菩薩の境界へ至ることに喩えられます。法華経を信じ、学び、実践することによって、煩惱という泥の中で徳を積み、仏さまのもとに生じることができると示されたのです。法華経の教えが集約されている句です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

11

日 水曜

仏滅 女

旧8月9日

妙法蓮華経提婆達多品第十二

且待須臾

しや だい しゆ ゆ

「しばし待たれよ」

多宝如来に付き従ってきた智積菩薩が、法華
真実の証明を終えて使命を果たされたので、
ご自身の本土におかえりなっではいかがでし
ようかと多宝如来に申し出ました。

すると、お釈迦さまは「しばし待たれよ」と
告げられました。

そして、末法に法華経を弘めるために、誰も
が仏に成れることを強く伝えねばならないと
前置きをされ、「女人成仏」が説かれます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

12日

大安 虚

旧8月10日

木曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

む しゆ ぼさつ
無数菩薩

ぎ ほうれんげ
坐法蓮華

じゆうかいゆじゆうつ
従海湧出

けいりようじゆせん
詣靈鷲山

じゆうざいこくう
住在虚空

「海から現れた菩薩たちが虚空に止まる」

数限りない菩薩が蓮の華に坐し海から現れ、

靈鷲山の上の虚空に止まりました。

海から出て陸を通り越し空に止まったという

ことは、すべての世界のあらゆる生命ある者

が、法華経によって残らず救われることが表

されています。

いかなる境遇にあっても、ひとたび法華経を

信じ帰依した者は皆救われるという意味が込

められている表現です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

13日

赤口 危

旧8月11日

金曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

だい じょう ふう き

大乘空義

「大乘の空の義」

「大乘の空の義」とは、差別が歴然として存在する中に平等の理が存在することを見通す仏さまの智慧のことです。

善人は正しく悪人は間違っていると、白か黒かで差別するのではなく、善人も悪人も共に仏性を具えているので、修行次第で仏に成れる存在平等であると受け止める智慧です。

海中にて声聞の修行で満足していた者たちも、今は大乘の修行をしていると示されています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

14日

先勝 室

旧8月12日

土曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

こう どう しょ ぐんじょう りょう そくじょう ぼ だい

広導諸群生 令速成菩提

「広く衆生を導き 速やかに菩提を成ぜしむ」

すべての物事の中にある真実を説き明かし、すべての衆生に道を示し導くことによって速やかに仏に成れると説かれた句です。

「速やかに」とは、他の道を通らないということ、一つの道をまっすぐに行くことが何よりの近道であるということです。

最も勝れた教えである法華経を学び、迷うことなく進めば必ず仏に成ることができるとは、この句は僧侶の回向文に用いられます。

妙法蓮華經提婆達多品第十二

未來世中。若有善男子。善女人。聞妙法華經。提婆達多品。淨心信敬。不生疑惑者。不墮地獄。餓鬼畜生。生十方佛前。所生之處。常聞此經。若生人天中。

受勝妙樂。若在佛前。蓮華化生。於時下方。多宝世尊。所從菩薩。名曰智積。啓多宝佛。當還本土。釈迦牟尼佛。告智積曰。善男子。且待須臾。此有菩薩。

〔略〕

其數無量。不可稱計。非口所宣。非心所測。且待須臾。自當有証。所言未竟。無數菩薩。坐宝蓮華。從海涌出。詣靈鷲山。住在虛空。此諸菩薩。皆是文殊師利。之所化度。具菩薩行。皆共論說。六波羅蜜。本声聞人。在虛空中。說声聞行。今皆修行。大乘空義。文殊師利。謂智積曰。於海教化。其事如此。爾時智積菩薩。以偈讚曰

大智德勇健 化度無量衆 今此諸大会 及我皆已見
演暢実相義 開闡一乘法 広導諸群生 令速成菩提

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

15日

友引 壁

旧8月13日

日曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

しやつか ら りゆう おう によ

娑竭羅龍王女

「娑竭羅龍王の娘」

文殊菩薩は海中で妙法蓮華経を説いた際に、娑
竭羅龍王の娘(龍女)が一瞬にして悟りを得たこ
とを、智積菩薩に告げました。

龍女は人々の性格や行ないを見て、修行の大事
なところを的確に見極め、善行を進めるよう
と導き、悟りに至ることができました。

自分の勝手な考えにとらわれず、素直に法華経
を聞いて受け入れたから、その正しい意味を理
解し、人々を導き悟りに至ったのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

16日

先負 奎

旧8月14日

月曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

ち

しゃく

ぼ

きつ

智積菩薩の疑問

ぎ

もん

「龍女の成仏を信じられない智積菩薩」

お釈迦さままでさえ大変な苦勞をされて、ようやく悟りを得られたというのに、八歳の龍女が一瞬で成仏したなどには信じられないと智積菩薩は疑問を膨らませました。

お釈迦さまは永い修行を経て得た悟りを、法華経にわかりやすく説いてくださいました。

私たちは法華経を信じることで、悟りへの近道を行くことができますのです。

その大慈悲を信じる難しさが説かれています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

17

日

仏滅 婁

旧8月15日

火曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

じん

たつ

ざい

ふく

そう

深達罪福相

「深く罪福の相を達して」

お釈迦さまは人々の行いの根本を深く見極めて
罪から遠ざけ、福へと導いてくださいます。

我々凡夫は表面だけを見て、善悪をとらえがち
ですが、お釈迦さまは善悪の裏側にある背景や
心の奥底まで深く見極め、立て直しをさせよう
と考えて、遍く十方を照らし、すべての人々を
救ってくださるのです。

龍女の成仏を承知しているのもこの力によるも
のです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

18日

大安 胃

旧8月16日

水曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

によ しん く え

女身垢穢

「舍利弗らの女人蔑視」

古来インド社会には女性蔑視の風潮があり、お釈迦さまの弟子である舍利弗尊者もその影響を強く受けていました。

龍女が目の前に現れても、女性は穢れており無量劫という永い期間修行を積んでようやく成仏できるのだと舍利弗は持論を展開しました。

そして女性は梵天・帝釈・魔王・転輪聖王・仏陀になることができないうという「女人五障」を説きました。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

19日

赤口 昂

旧8月17日

木曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

五障ごしょう

「女性が持つとされた五つの障害」

「女人五障」ともいい、女性が持つとされた五つの障害のことで、女性は梵天・帝釈・魔王・転輪聖王・仏陀になれないという説。

五障は、お釈迦さま入滅後かなり後代になって、一部の仏教宗派に取り入れられた考えで、紀元前一世紀に初めて仏典に登場したものの。

仏教がスリランカに南伝する以前（紀元前三世紀以前）の原始仏教には存在せず、ヒンドゥー教の影響から出てきた考え方でされています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

20日

先勝 畢

旧8月18日

金曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

う いち ほう じゆ

有一宝珠

「龍女成仏の証明」

龍女の成仏を信じない智積菩薩や舍利弗には口
で言うより、事実を見せたほうがよいと、龍女
は三千大千世界の全ての宝に匹敵する宝珠をお
釈迦さまに献じました。

お釈迦さまはその宝珠を直ちに受け取ります。

これはお釈迦さまと龍女の心が一瞬で通じ合っ
たということであり、龍女が法華経を信受した
ことによって成仏したとお釈迦さまが証明され
たことなのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

21日

友引 鶯

旧8月19日

土曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

へん じょう なん し

変成男子

「龍女が変じて男子となる」

智積菩薩と舍利弗をさらに納得させるために、龍女は自分が仏に成る様子を見せます。

龍女は女性の姿から男性の姿に変わり、南方の「無垢世界」にて法華経を説きました。

男性の姿に変わったのは、仏は男にも女にも成れるということであり、男女の性別を超越した存在であることを示しています。

仏に成る上でも、菩薩の道を行ずる上でも、男女の差別が無いのが仏教です。

妙法蓮華經提婆達多品第十二

及我皆已見 演暢實相義 開闡一乘法 廣導諸群生 令速成菩提 〔略〕

文殊師利言。有。娑竭羅龍王女。年始八歲。智慧利根。善知衆生。〔略〕

智積菩薩言。我見釈迦如來。於無量劫。難行苦行。積功累德。求菩薩道。〔略〕

深達罪福相 氣照於十方 微妙淨法身 具相三十二 以八十種好 用莊嚴法身

〔略〕

爾時舍利弗。語龍女言。汝謂不久。得無上道。是事難信。所以者何。女身垢穢。

非是法器。云何能得。無上菩提。仏道懸曠。徑無量劫。勤苦積行。具修諸度。然

後乃成。又女人身。猶有五障。一者不得。作梵天王。二者帝釈。三者魔王。〔略〕

爾時龍女。有一宝珠。価直三千大千世界。持以上仏。仏即受之。龍女謂智積菩

薩。尊者舍利弗言。我献宝珠。世尊納受。是事疾不。答言甚疾。女言。以汝神

力。觀我成仏。復速於此。當時衆會。皆見龍女。忽然之間。變成男子。具菩薩

行。即往南方。無垢世界。坐宝蓮華。成等正覚。三十二相。八十種好。普為十

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

22日

秋分

先負 参

旧8月20日

日曜

妙法蓮華経提婆達多品第十二

いっさい しゆ え

もく ねん しん じゆ

一切衆会 默然信受

「一切の衆会 默然として信受す」

龍女の成仏について異論を唱えていた智積菩薩や舍利弗は、疑いが晴れ、自分たちが理解していたところに留まっていたはいけないと気づき、静かに法華経を信受するという場面で『提婆達多品』は幕を下ろします。

善人も悪人も、男性も女性も、老いも若きも、ただ仏さまを信じ、一心に仏の道を歩めば、皆仏に成れるのだと、提婆達多と龍女の事例を通して説かれたのが『提婆達多品第十二』です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

23日

仏滅 井

旧8月21日

月曜

妙法蓮華経勸持品第十三

かんじ
勸持

「信じる心を持ち続け、弘めることを勧める」

仏さまの心持ちを自分の心持ちとして努めてい
れば、いずれ仏に成れると、『提婆達多品』まで
の法華経前半で説かれてきました。

その尊い教えを普く世の中に弘める道を説く
のが『勸持品』です。

「勸持」とは持つ(たもつ)ことを勧める意味です。

多くの人々が法華経を深く信じ、その心を持ち
続け、世に弘める決心をするようにと勧めるこ
とが肝要であると説かれるのが勸持品です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

24日

大安 鬼

旧8月22日

火曜

妙法蓮華経勸持品第十三

だい

ぎようせつ

ぼ

きつ

大楽説菩薩

「偉大な弁舌の才ある菩薩」

偉大な弁舌の才ある菩薩という意味。

「楽説」とはこころよく法を説くこと。

「楽」には「願う」という意があり、「楽説」

とは相手のために説くことを願う、あるいは相

手の願いを知るなどの種々の語義があります。

宝塔品では、宝塔の出現に驚いた聴衆を代表し

て大楽説菩薩が釈尊に質問しています。

勸持品では、薬王菩薩と大楽説菩薩が二万人の

菩薩たちと法華経の受持と弘通を誓います。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

25日

赤口 柳

旧8月23日

水曜

妙法蓮華経勸持品第十三

ふ

しゃく

しん

みよう

不惜身命

「身命を惜しまず」

お釈迦さまの滅後、世の中が荒れてくると、自分勝手に思い込み教えを受け入れない者や、自分の利益のみを求める者など「増上慢」が増えってきます。

「増上慢」に教えを説き、正しい道に導くのは非常に難しく、時には命の危険もあり、大きな苦勞も厭わず忍んでいく力が必要になります。正しい教えを弘めるためには「身命を惜しまず」という決心が肝要になるのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

26日

先勝 星

旧8月24日

木曜

妙法蓮華経勸持品第十三

於おい異こく国ど土
広こう説せつ此し経きよう

「他の国土においてこの経を弘めます」

『五百弟子授記品第八』で授記を得た五百人の阿羅漢たちは、この娑婆世界以外の国土において広く法華経を説くことを誓います。娑婆世界は人の心が悪く、増上慢で瞋りや憎しみが満ちており、正しい教えを捻じ曲げてしまふ者もあり、弘教には困難が伴う国です。ですから、娑婆世界の弘教は徳の勝れた菩薩たちにお任せして、自分たちの実力相応の国で弘教に努めると誓ったのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

27日

友引 張

旧8月25日

金曜

妙法蓮華経勸持品第十三

摩訶波闍波提の授記

「お釈迦さまの養母 摩訶波闍波提の授記」

摩訶波闍波提は、お釈迦さまの叔母であり養母であり、お釈迦さまの弟子 孫陀羅難陀（そんだら なんだ）の母でもあります。

「摩訶波闍波提」の語には「大きな功德」という意味があり、お釈迦さまを養育された大きな功德を指すのでしよう。

弟子たちへの授記がひと通り済んだ後に、お釈迦さまをまつすぐに見つめていた摩訶波闍波提に授記を与えられました。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

28日

先負 翼

旧8月26日

土曜

妙法蓮華経勸持品第十三

やしゅだら じゆき

耶輸陀羅の授記

「お釈迦さまの妻 耶輸陀羅の授記」

耶輸陀羅は、お釈迦さまの出家前の妻であり、十大弟子羅睺羅の母でもあります。

お釈迦さまは摩訶波闍波提に続き、耶輸陀羅にも授記を与えられました。

女性蔑視の風潮が強かった当時、女性が仏に成ろうと覚悟するのは大変なことです。

お釈迦さまは二人の女性の決心が堅固になるまで時期を待ち、いよいよ発奮してきたところで授記を与えられたのです。

妙法蓮華經勸持品第十三

爾時藥王菩薩摩訶薩。及大樂說菩薩摩訶薩。与二万菩薩眷属俱。皆於仏前。作是誓言。唯願世尊。不以為慮。我等於仏滅後。当奉持誦誦。說此經典。後惡世衆生。善根転少。多增上慢。貪利供養。增不善根。遠離解脱。雖難可教化。我等当起大忍力。誦誦此經。持說書写。種種供養。不惜身命。爾時衆中。五百阿羅漢。

得受記者。白仏言世尊。我等亦自誓願。於異国土。広說此經。復有学無学八千人。得受記者。從座而起。合掌向仏作是誓言。世尊。我等亦当。於佗国土。広說此經。所以者何。是娑婆国中。人多弊惡。懷増上慢。功德淺薄。瞋濁諂曲。心不実故。

爾時仏姨母。摩訶波闍波提比丘尼。与学無学比丘尼。六千人俱。從座而起。一心合掌。

〈略〉

爾時羅疫羅母。耶輸陀羅比丘尼。作是念。世尊於授記中。独不說我名。仏告耶輸陀羅。汝於来世。百千万億諸仏法中。修菩薩行。為大法師。漸具仏道。於善国中。当得作仏。号具足千万光相如来。応供。正氣知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

29日

仏滅 軫

旧8月27日

日曜

妙法蓮華経勸持品第十三

せそん どうし

世尊導師

がとう もんき

あんのんてんにん

安穩天人

しんあんぐそく

我等聞記

心案具足

「お釈迦さまは安穩を与えてくださる導師」

摩訶波闍波提と耶輸陀羅とその従者たちは、今まで女人は成仏しなと言われていたけれど、お釈迦さまから仏に成れると授記を与えられて非常に悦び、感謝の思いを表しました。お釈迦さまは天上界・人間界のあらゆる者を導き、心に安穩を与えてくださる導師です。この文を過去帳の奥書きに記し、過去帳に記載された霊位の冥福を祈念するとともに、今を生きる私たちも日々の安穩をいただくのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

9月

30日

大安 角

旧8月28日

月曜

妙法蓮華経勸持品第十三

しゅう せん おう へん

周旋往返

「機会がある毎に教えを説く」

「周旋往返」とは、機会がある毎に、縁がある毎に、教えを説くということです。

怠け心が働いて、せっかく学ぶ機会がなくても、今日は疲れたから明日にしよう、先延ばしにしてしまうことではないでしょうか。

機会がある毎に正しい教えを弘めようとするならば、その教えを強く受持することから始めなければなりません。

その受持する心を「周旋往返」するのです。

妙法蓮華經勸持品第十三

世尊導師 安穩天人 我等聞記 心安具足

諸比丘尼。說是偈已。白仏言。世尊。我等亦能。於他方国土。広宣此經。爾時世尊。視八十万億那由他。諸菩薩摩訶薩。是諸菩薩。皆是阿惟越致。転不退法輪。得諸陀羅尼。即從座起。至於仏前。一心合掌。而作是念。若世尊。告敕我等。持説此經者。当如仏教。広宣斯法。復作是念。仏今默然。不見告敕。我当云何。時諸菩薩。敬順仏意。竝欲自滿本願。便於仏前。作師子吼。而発誓言。世尊。我等。於如来滅後。周旋往返。十方世界。能令衆生。書写此經。受持誦誦。解説其義。如法修行。正憶念。皆是仏之威力。唯願世尊。在於他方。遙見守護。即時諸菩薩。俱同発声。而説偈言